

# 上原専祿「課題化的認識」論における「課題化」の方法論理 — 固有の歴史観が生み出す「過去－現在－未来」の相対化 —

片岡弘勝 奈良教育大学学校教育講座 (教育学)

## The Methodology of “Subject Oriented” in UEHARA Senroku’s “Subject Oriented Recognition” Theory: Relativating “Past-Present-Future” by Original Historical Logic

KATAOKA Hirokatsu

*(Department of School Education, Nara University of Education)*

### Abstract

The purpose of this article is to clarify the methodology of “subject oriented” in UEHARA Senroku’s “subject oriented recognition” theory through focusing the relativating “past-present-future” by original historical logic. This study clarified the following six points on these issues.

1. The characteristic of UEHARA’s historical approach is the “turn and return” between “present” recognition and “past” recognition.

2. The recognition joint of “historical realities” was made by this “turn and return” recognition. UEHARA paid attention to “independence of the oppressed national peoples” in 1960’s.

3. UEHARA’s historical approach is composed by “historical thinking method” and “non-historical thinking method”. The former is oriented for understanding lives and jobs in historical context. The latter is oriented for understanding “something rising above the stream of time”. “Shishin” of UEHARA’s mind checks all recognitions relatively and makes all recognitions pending constantly.

4. The implication of “historical recognition” in UEHARA’s “historical recognition of life-realities” method is to recognize and limit all life-realities in the stream of time. In UEHARA’s logic, this “historical recognition” connects “subject oriented recognition” with “historical recognition of life-realities”.

5. The intention for “future”(“changing historical realities”) originated in “education for forming independent national peoples” that was the only hope for UEHARA’s risk recognition in 1960’s.

6. In learner’s recognition process of UEHARA’s theory “understanding historical realities” and “self-consciousness of impossibility on problems solution” is checked by the following two overlooking standpoints relatively. One is the overlooking standpoints from temporary imaged “future”. Another is the overlooking standpoints from “past” (in investigating the fundamental factors of “historical realities”). These two checking moments brings the powerful imminence to learners. Accordingly, “Shishin” of UEHARA’s mind makes “subject oriented consciousness” in learner’s motivation by the connection of above-mentioned “pending recognition”, “self-consciousness of impossibility on problems solution” and “overlooking standpoints”.

キーワード：「課題化的認識」,  
「生活現実の歴史化的認識」,  
上原専祿

**Key Words:** “subject oriented recognition”,  
“historical recognition of life-realities”,  
UEHARA Senroku

## 1. はじめに—問題意識と課題限定—

### 1.1. 問題意識—「経験知」と「科学知」を統一する方法論理—

教育実践・教育理論における積年の重要課題の一つとして「経験学習と系統学習の統一」が挙げられる。この課題は、学校教育のみならず社会教育においても問われ続け、1950年代に隆盛した共同学習に対する批判と反批判の流れの中で深められてきた。すなわち、まず1950年代に盛り上がった青年団の「共同学習」がその科学性・系統性の弱さを指摘され、1960～1970年代にその批判としての「科学の系統的学習」の動きが強くなった。しかし、その主な動きが「既成の知識の普及や系統的教授」に留まる傾向となったため、更なる反批判が加えられた。こうして「高次の問題解決学習」が「高度な科学」と「深い生活認識」の両方を同時に求める、という意味と文脈で「高次の共同学習」を志向するという学習論が提唱されたのである。藤岡貞彦は、この一連の流れを「共同学習の否定の否定」と表現し、学習主体による「学習の必要の自覚」を基盤にした上で「科学」と「地域の生活現実」とを結びつける学習の組織化を提唱した<sup>(1)</sup>。

また、島田修一は、1980年代末時点での「現代成人学習内容論」を総括する論文の中で、この藤岡と同じ課題意識に立って、次のように指摘した。

「自己教育活動を本質とする社会教育においては、学習内容は学ばれるべき個別科学の論理においてではなく、学習者の認識の発展のすじ道に即して編成されるべきなのである。したがって、そこに貫かれるのは、『何を学ぶのか』という学習内容論は『何に向けての学びか』の探求の論理でなければならない。[中略]すなわち、認識の科学性と主体性を同時に形成できるような自己教育の主体をつくりあげるところに、社会教育実践の課題がすえられるべきであり、それが現代成人学習内容論の原理となるべきであろう。」<sup>(2)</sup>

このように島田も「科学知」と「経験知」の統一の課題を「認識の科学性と主体性を同時に形成できるような自己教育の主体」という語句で表現した。

以上に述べた理論枠組みに関わる主要論点を腑分けすると、学習主体の内面に形成される課題意識を含む「学習の必要の自覚」および、それを起動力として形成される学習主体の主体性と、認識の科学性・系統性との相互連関をどのようにしてとらえ、結びつけながら学習活動を組織化していくか、と整理することができる。この論点は、その後、理論的には十分に深められることなく今日に至っている。

藤岡および島田による既述した議論は、立論の際の引用や明示された援用およびその内容からみて、明らかに上原専祿(1899–1975年、「世界史像」研究者、思想家)

の「課題化的認識」および「生活現実の歴史化的認識」を含む「主体性形成」論に依拠するか、あるいはこれらからの大きな影響を受けて展開されたものである。ただし、上原における認識の「科学性」と「主体性」は、島田が想定していると推測される二元論法ではなく、後者を基礎にして統一する一元論法で構成されていた<sup>(3)</sup>。

筆者は、以上に述べたことを別稿<sup>(4)</sup>で既述した。しかし、その別稿では、これらの認識形成・深化の起動力となる「課題意識を含む「学習の必要の自覚」」が形成される上での具体的な方法論理に十分に立ち入ることができなかった。それを上原理論研究に即して換言すれば、「課題化的認識」の鍵語である「課題化」とは何か、上原が提起したもう一つの「生活現実の歴史化的認識」とどのように結びつくのかという問いに関して言及することができなかった。これらの点が明らかにならなければ、「経験知と科学知とは統一されなくてはならない」という実践上・理論上の当為目標を指摘することに留まってしまい、どのように統一するのか、という問いに応える方法論理を導くことができない。その際、学習論の具体的な方法論理に立ち入って考える上で、発想の始原となった上原理論が含意していた「課題化」の方法論理を確かめることによって有力な手がかりを得ることが予想される。

### 1.2. 課題限定—「課題化」の含意—

上原は、1960年代前半という時期に狭い教育学領域にとらわれることなく、かつ「世界史像形成」研究者として国内外の歴史学手法に関する深い造詣を基礎にして、K. マルクスの「法則化的認識」とM. ウェーバーの「個性化的認識」を統合する方法として「課題化的認識」を提起した。まず上原による説明を次に引用する。

「問題直観においてとらえた世界と日本と自己との分裂をどう克服していくかという問題、日本民族の過去と現在と未来とをどう統一的につないでいくかという問題、別の言葉でいいますと、歴史的現実の重荷を背負いながら、歴史的現実に即して、歴史的現実を変更していくという問題、その問題の基本的構造と基本的内容を歴史的現実そのもののうちに探り出すことによって、問題直観を課題認識へと定着させていくこと」<sup>(5)</sup>

「生活経験のなかで直観的にとらえられた実際的かつ実践的な問題の、基本的な意味、構造、内容、動態を歴史的現実そのものに即して追究していくことによって、問題直観を課題認識へと定着させていく」、「事実や事態をたんに事実そのもの、事態そのものとして受けとるのではなく、解決、克服、対決、実現などを要する課題として受けとるところに、『課題化的』と呼んでよい認識方法が成り立つはずだ」〔傍点は原

文一引用者]<sup>(6)</sup>

これらの引用文章には、「課題化」という鍵語の含意に関わって、「問題直観を課題認識へと定着させていく」および「事実や事態を解決、克服、対決、実現などを要する課題として受け取る」という説明が記されている。さらに注目すべきことは、これらの説明に接続している「歴史的現実」というもう一つの鍵語である。この鍵語からは「課題化的認識」が何らかの意味で歴史的アプローチと関連づけて構想されていることが読み取れる。

上原は、ほぼ同じ時期に「生活現実の歴史化的認識」という著名な認識方法を提起した<sup>(7)</sup>。この表現に照らせば、「生活現実の歴史化的認識」も歴史的アプローチが導入されていることは明白である。しかし、上原理論の場合、歴史的アプローチの意味は、単に時の流れ・推移に即した人間・事物の変容過程を重視するという域に留まるものではない。それは、学習主体の認識そのものを深い次元から支え、揺り動かし、その結果、一層深める上で大きな動因となっていることが注目される。以上のことから、上原理論の内部において、「課題化的認識」の「課題化」と、「生活現実の歴史化的認識」の「歴史化」とは、深く関連していることが予想される

筆者は、これまで「価値概念としての地域」、「地域—日本—世界の現実を串刺しにして把握する」、「国民形成の教育」、「国民文化」、「インテリの大衆化」、「死者のメディア」、「主体性」等々の上原理論を構成する鍵概念を分析してきた。また、上原独特の「認識のリアリズム」および「教育的価値」にまで踏み込んでそれらの発想論理の解明を試みてきた<sup>(8)</sup>。しかし、歴史学者である上原が駆使してきた歴史的アプローチによる発想・契機の意義について本格的に問い、言及することができなかった。他方で、歴史学関係者（石原保徳、浜林正夫、田中陽児、吉田悟郎）による先行研究においても、前記した「課題化」の含意、「課題化的認識」と「生活現実の歴史化的認識」との関連構造について本格的に論及した例は、筆者管見の限り皆無である<sup>(9)</sup>。あえて取り上げるとすれば、田中陽児による次の有意な指摘が注目される。田中は、上原理論の特徴としてその「歴史学の内面化志向の強烈さ」を指摘し、『独逸中世史研究』その他で発揮される実証作業の執拗さ—つきはなし、と、『現代認識の問題性』その他で展開される意味づけの熾烈さ—たぐりこみ、とは上原理論的方法的な二大支柱であるが、このつきはなしとたぐりこみの振幅の大きさは比類がなく、そのために一見整然たる論理展開のあいだをぬって観念の飛翔作用が可能となる。<sup>(10)</sup>と述べた。この「つきはなしとたぐりこみ」は、上原理論の重要部を衝いた有意な指摘であるが、田中は、この「つきはなしとたぐりこみ」の方法論理の内部構造には言及していない<sup>(11)</sup>。

以上のことから、本稿は、＜認識を形成し深化させる

契機＞としての歴史的アプローチの意義に特化して上原理論を解明する初めての試みである。その際、論点は、上原の「課題化的認識」方法では何故に歴史的アプローチを必要とするのか、その「課題化」とはどのような意味なのか、という点に焦点化される。以後、歴史的アプローチを必要とする必然性について論じるために、上原理論に前提されている「歴史」観、さらには時間軸観にまで深く掘り下げて考察していく。

本稿の論述構成は、次のとおりである。まず、歴史学者・上原が一貫して重視した歴史的アプローチは＜現在＞の問題意識と＜過去＞の史実認識との往還により、両者各々の深まりを予定するものであったこと、その両者往還の結節として「歴史的現実」という語句を導き出したこと、「非歴史的思惟方法」と「歴史的思惟方法」という相対立する思考方法が並存したこと、以上の発想の奥底に潜在する「史心」という上原独特の相対化精神が「非歴史的思惟方法」と「歴史的思惟方法」を結びつけていることを、上原の著作からの引用と照合させながら論証していく。その結果、上原の歴史的アプローチにおける「歴史化」の含意には、「史心」精神によりあらゆる事象・事物を相対化する作業を徹底し、時間・空間の中に限定づけるという意味を含んでいることを確認する。

次に、この「歴史化」によって「課題化的認識」と「生活現実の歴史化的認識」が結びつけられていたこと、および、以上にみた＜現在＞と＜過去＞に向かう上原理論の志向性は、そもそも立論の前提である「未来」志向に由来していることを確認する。その上で、「史心」の相対化作用がもたらす＜認識の未決定（保留）状態＞、＜解決不可能の認知・自覚＞および＜俯瞰的視座＞を主契機とする認識の展開と、＜未来と現在＞および＜現在と過去＞の往還を通して、課題認識が生み出されることを論じていく。

本稿は、上原理論を構成する諸契機とその論点の相互関連をおさえた上で同理論の基本的骨格・枠組みを明らかにする理論作業および、このことを通して戦後日本の「学問の生活化」論の系譜から未発の積極的契機を探り出す基礎作業の一環である。以後の論述では、筆者がこれまで蓄積してきた上原理論研究の成果を論点と文脈に応じて再掲することがある。その際には、当該別稿に示した論証を割愛するが、参照を可能にするため出典を明示する。

## 2. 上原専祿理論における歴史的アプローチ —「歴史化」と「史心」—

### 2.1. 「歴史的思惟方法」における〈現在〉と〈過去〉の往還

上原は、東京商科大学在学中よりドイツ中世史研究を始め、ウィーン大学留学中にはそのヨーロッパ流の研究手法を修得した。そして、第二次世界大戦敗戦後、歴史学の方法論を深めつつ、独自の「世界史像」形成に取り組んだ。その生涯と研究活動では、まさしく歴史的アプローチを究める関心が一貫されていた。ただ、その歴史的アプローチの基本発想は、〈時の経過に即して史実を実証していく〉という域に留まるものではなく、〈現在〉の問題意識と〈過去〉の史実認識との往還により、両者各々の認識を深めようとするものであった。

この基本発想が、最も整理された形で記述されている著作が、『歴史学序説』（大明堂、1958年）の前半部である「第一部 歴史学の概念」の「第一 歴史研究への基本態度」および「第二 歴史学の概念」である。これらの叙述の中から、歴史的アプローチの基本発想の説明に該当する記述を抽出して次に引用する。

「世界史研究というものは、今もいきましたように私どもが生きているこの現代とは何かという問題から出発して行われていくのでありまして、そういう現代への問題意識というものと無関係に世界史研究というものは絶対にできないと思うのです。そうだとすると、特に世界史の出発点として、あるいはある意味における世界史研究の帰着点として、現代史研究というものが、特別の意味で重要性を帯びてくると思うのです。慎重な歴史研究者というものは少なくとも半世紀以上たった事件や事態でなければ研究の対象にはしない、というようなことをいう人もあります。しかし私たちが歴史研究をするという意味は、この生きている、動いている世界の現実の中で、自分たちは、日本の国民はどのような位置に立っているか、その中で各人はどのような状態に置かれているか、また世界の人はどのような問題をどう担っており、そのような問題の構成に諸民族、諸社会層はどういうぐあいに参加しているだろうか、そういうことを経験科学的につかむのが歴史学研究の任務だ、と思うのであります。そうすると、現代についての研究が非常に大事になってくるのだが、それが今までは冷遇されておった。」〔下線は引用者〕<sup>(12)</sup>

「第三には、『歴史学の研究方法』について、解明が行われなければならぬだろう。歴史学の認識対象——すなわち、歴史学が知的にとらえようとするところの客体——は、われわれ自身をも含めた人間の生活現実というものである、といってよい。すなわち、過ぎ

去ったものとしてわれわれによって意識されてはいるが、しかもなんらかの意味でわれわれがそれとのつながりを意識しながら未来を切り開き築き上げようとしているその生活現実、過去のものと考えられてはいるが、われわれの生きた現在の問題意識にとって『意味』のあるもの、無視しえないものと考えられているその生活現実、そういう生活現実というものが歴史学の認識対象を形作るのだ、と考えられる。ところで、われわれの生きた現在の問題意識や生活意識というものは、われわれ自身の生活経験によって、構造やあり方、形式や内容、律動や旋律などが規定されるものだろう。歴史学というものは、このような生活経験によって規定されたわれわれの問題意識や生活意識によって、意味があると想定されたところの人間の生活現実を、一定の方法にしたがって知的にとらえようとする一つの経験科学にはかならない、といえよう。」〔傍点は原文、下線は引用者〕<sup>(13)</sup>

引用文のうち特に下線を引いた箇所には〈現在〉（「現代」）の問題意識と〈過去〉の史実認識との往還を繰り返して強調していることが確かめられる。その往還から生まれる相互作用により〈現在〉と〈過去〉の各々の認識が一層深められていくことも想定されている。

〈現在〉と〈過去〉との往還に焦点化すると、1963年に初めて「生活現実の歴史的認識」を提唱した論文「現代認識の問題性」（初出『岩波講座 現代 第一巻 現代の問題性』）の中で、上原はその見解を次のように深めていた。

「日本の大衆が自覚し、発見し、設定した諸問題への問題意識を基軸とし、それらの問題意識を認識原理として歴史像を形成する、というのは、現在の問題意識を過去に逆投影させ、今日の問題状況の総体としての現在の生活現実の祖型のようなものを歴史像として設定する、ということでは、もとよりありません。こういう認識方法では、『過去』と『現在』の識別が不可能になりますし、『諸時代』の観念も——したがって、『現代』の観念も——死滅します。こういう認識方法ではなくて、現在の問題意識に対応し、場合によっては連接さえする諸問題の存在形態と存在理由を探究すると同時に、現在の問題意識に対応する問題の非存在をつきとめ、その理由を明らかにしていき、さらに、現在の問題意識に対応することのない別種の諸問題の存在形態とその存在理由をも追究していき、それらの諸問題の存在ならびに非存在の全構造ならびに全動態として『過去』を形象化することが、現在の問題意識を基軸とし、それを認識原理として歴史像を主体的に形成する、と私が言った認識方法の基本的意味なのです。こういう認識方法によってこそ、『過去』はまさしく『過去』として把握しうる、と私は考える

のですが、『過去』を『過去』として把握することによって、『現在』はあらためて『現在』として再自覚されうる、と思うのです。いずれにしましても、『現在』の問題意識を出発点とし、それを手がかりとして『過去』を形象化していき、形象化されたその『過去』を媒介として、あらためて『現在』を認識していく、こういう操作の反復が、『生活現実の歴史化的認識』と私が呼んできたものの作業内容の骨格であるわけです。」[下線は引用者]<sup>(14)</sup>

引用文章のうち下線を記した箇所から、単なる〈現在〉と〈過去〉との往復ではなく、両者が相互に相対化され区別されていく方法を含む往還であることを読み取ることができる。こうした方法は一般的な表現となっているが、上原が自らの関心に即して具体的に表明した事柄が、次の発言にみられるような「世界史の起点13世紀」への注目である。

「非常に手のかかったことになりませけれども、現代の問題というものは、少なくとも十三世紀にまでさかのぼって、はじめてその起源というものをつかむことのできるような問題なのである。」<sup>(15)</sup>

「十三世紀というものは、何と言ってもまだアジア世界、イスラムを込めたアジア世界がヨーロッパに対してなお優越、それは政治的・経済的だけじゃなくて、宗教的・文化的にも優勢な地位に立っておる時点だと思えますが、それに対するカウンターアクションのようなものが、十四世紀、十五世紀に広がっていく。ヨーロッパのほうは、そういうアジアのほうに斬り込んで行こうとする。その斬り込んでいく一つのかたちが、十五世紀末から十六世紀初頭にかけての、ヨーロッパ人による新大陸の発見とか、航路の発見ということになると思うんでありますが、ま、そういう状態であります。[改行] そこでですね、十三世紀は、ヨーロッパとアジアとアフリカが一つの問題を抱えるという意味でつながってきた時代」<sup>(16)</sup>

このような独特の13世紀への着目は、モンゴル帝国圏の地理的拡大に伴って、世界史が一体化し始めたこと、その動きの一端が「モンゴル軍の九州北部襲来」となって現象し、当時の僧・日蓮の行動と思想の中に、「生命の尊貴」が世界史的規模で問われる始原を見出そうとしていた<sup>(17)</sup>。

## 2.2. 「歴史的現実」という発想

既述した〈現在〉と〈過去〉を往還する認識方法は、「歴史的現実」という語句と深く関連することになる。上原は、1950年代から1960年代にかけて、「歴史的現実」という語句を多用した。この語句が用いられる文脈は、敗戦直後から1950年代にかけて日本に紹介され導入され

た「新教育」においては当該教育課題が背負わされている客観的な歴史的現実の問題状況への認識が抽象的で一般的であったという弱点に対する強烈な批判意識に立つものであった。そして、上原は、この「歴史的現実」という語句を用いて、当該事象の問題が形成され展開してきた歴史的経緯と累積された問題構造を把握することの重要性を提起していた。上原が、この関心に立って1950年代の教育関係論稿を集約して公刊した著作が『歴史意識に立つ教育』（国土社、1958年）であり、問題意識がそのまま書名に反映されることになった。

上原は同書では、アジア・アフリカ諸国・諸民族との連帯志向をいち早く表明し、1960年代になると、世界的見地から国内外における「民族の独立」論を提唱した。1960年安保条約反対運動の渦中とその前後で「民族の独立」が注目された頃のことである。こうした時代状況の中で、「歴史的現実」という語句は後に『著作集14 国民形成の教育 増補』（1989年）に収載された1960年代前半（上原が1964年5月に国民教育研究所の研究会議長を辞任するまで）の論稿・講演記録20編の中で頻繁に用いられた。

1960年代当時に上原が「歴史的現実」の認識を提唱した際に重視していた具体的な諸問題は、「世界平和の確立」、「民族の独立」、「社会の民主化」、「貧乏の根絶、生活の向上」の四つであり、これら四つの問題はすべてが「いったい人間とはなにか、人間は人間の尊厳を実証することができるかどうか」という問題に帰着する」と述べ、さらに「世界平和の確立」、「社会の民主化」および「貧乏の根絶、生活の向上」の三課題を「民族の独立という課題に凝集させて」取り組むことの必要を説いた<sup>(18)</sup>。

上原は、この点に関わって、次のように端的に整理している。

「その問題というのは、世界と日本と自己との分裂をどう克服していくか、国内における諸集団、諸個人のアトム化をどう克服して、そこに統一国民戦線をどう形成していくか、日本民族の過去と現在と未来とをどう統一的につないでいくか、政治と教育、政治と文化、政治と経済、それらの癒着や野合ではなしに、それらのお互いの間の緊張にみちた協力関係をどう作り出していくか、という問題であります。ところで、これらの問題は、ことごとく、自律的で主体的な民族集団の造出という問題ではないでしょうか。そこで私は、こうした問題をも当然含意しているものとして、民族の独立というものをあらゆる問題の中核に位置している問題として措定したわけです。」<sup>(19)</sup>

以上に挙げた引用文章と照合させると、1960年代以後に上原が頻繁に用いた「歴史的現実」という鍵語で想定していた具体的な「現実」は、「世界平和の確立」、「社

会の民主化」,「貧乏の根絶,生活の向上」の三課題を「民族の独立」という課題に「凝集させて」取り組むべきことであったことになる。これらの問題は、換言すれば直近に引用した「世界と日本と自己との分裂をどう克服していくか、国内における諸集団、諸個人のアトム化をどう克服して、そこに統一国民戦線をどう形成していくか、日本民族の過去と現在と未来とをどう統一につないでいくか、政治と教育、政治と文化、政治と経済、それらの癒着や野合ではなしに、それらのお互いの間の緊張にみちた協力関係をどうつくり出していくか、という問題」であった。これらのうち、「世界と日本と自己との分裂をどう克服していくか」および「日本民族の過去と現在と未来とをどう統一につないでいくか」の二つは、「1.2.」で引用した「課題化的認識」の説明文章でも言及されている。

さらに1963年の前掲論文「現代認識の問題性」では、「生活個体としての生活者と情況としての歴史的现实との間に成り立ちうる社会的諸関係というものを、生活者の基本的態度にかかわって典型的に考え」たものとして、「(a) 歴史的现实からの逃避、(b) 歴史的现实の利己的利用、(c) 歴史的现实への適応と追従、(d) 歴史的现实との対決、(e) 対決を通しての、新しい歴史的现实の創造」を列挙した上で、日本の「インテリ」層および「大衆」層の双方が、(a) (b) (c) の否定的方向ではなく、(d) および (e) の肯定的方向に向かう可能性を論じていた<sup>(20)</sup>。

上原は、この点に関わって次のとおり発言していた。

「日本の大衆は、世界の大衆と同様に、歴史的现实との対決、その対決を通しての新しい歴史的现实の創造、という基本的姿勢を原理的にとらざるをえない立場に立たされています。なぜなら、このような基本的姿勢をとるのでなければ、大衆には『未来』がないだけでなく、『現在』も不安きわまるものであるからです。」[傍点は原文一引用者]<sup>(21)</sup>

ここでは、<現在>と<過去>との往還により必然的に生まれる節として「歴史的现实」に注目した。この点については (d) が照応するということになるが、(e) は、<未来>との往還をも想定していることが注目される。この点は本稿の主要論点である「課題化」の含意に関わって重要であるので、改めて後段（「3.2.」および「3.3.」）で論じることとする。

### 2.3. 「歴史的思维方法」と「非歴史的思维方法」

上原理論は、既述した特徴をもつ歴史のアプローチを一貫して重視していた。ただし、歴史学者・上原による強烈な歴史のアプローチ志向は、同時に「非歴史的思维方法」の存在を前提していること、それと区別された形で「歴史的思维方法」を提唱してきたことを確認しなく

てはならない。その姿勢が顕在化した論文が前掲論文「現代認識の問題性」である。

この論文では、「歴史認識の一つ——厳密に言えば、生活現実の歴史的認識の一つ——としての現代認識という方法を基軸に」することの重要性を論じているが、その上で次のとおり述べていた。

「歴史認識としての現代認識が大衆の実生活と関係のない、また、主体性とアクチュアリティのない、たんなる教養主義的・遊戯的空想に終わってしまわないためには、そもそも歴史認識といわれるものの方法を練り直していく必要がどうしてもある、と考えられます。もう一歩つっこんでいうなら、知的作業としての歴史認識に前提されているはずの、歴史的思维方法そのものの存在理由をあらためて自覚化していく、という問題次元に降り立って、歴史認識の方法を新しく練り上げていく必要がどうしてもある、と私には考えられるのです。」<sup>(22)</sup>

「いったい、人類の世界史的発展における思维方法の歴史的あり方を通観しますと、一般に、生活や仕事を歴史的にとらえようとする思维方法と、非歴史的にしかとらえようとしないう思维方法との、二つの方法類型が、いわゆる古代から存在したし、現在も存在しているという事実、あらためて気づかされます。」<sup>(23)</sup>

このうち、「非歴史的思维方法」の一事例として挙げられているものが、「古代インド的形態」である。この形態について、次のように説明していた。

「歴史的時間ならびに歴史的空間の観念に完全に背を向けて、人間ならびに宇宙のリアリティを一挙にとらえ、さらに進んで人間のリアリティと宇宙のそれとの同一性の確信のうちに解脱をはかろうとしたウパニシャド哲学、その解釈学的発展としてのいわゆる六学派のブラフマニズム哲学の非歴史的思维方法は、素朴なかたちでは存在していた歴史的思维方法を圧殺した、または少なくとも未成熟の状態に釘づけした、と考えられるでしょう。」[下線は引用者]<sup>(24)</sup>

さらに、上原は、こうした「非歴史的思维方法」は、「人生の一切の問題を苦・集・滅・道の非歴史的原理においてとらえ、問題を歴史的時間ならびに歴史的空間の中においてではなく、まさしくその外において解決していこうとするものである限り、仏教はやはり非歴史的思维方法に立つ世界宗教の一つである、と言わざるをえません。」と述べ、「仏教的形態」を挙げている<sup>(25)</sup>。またヘレニズム時代もギリシアのゼノン、エピクロス、帝政期ローマのセネカ、エピクテトス、マルクス・アウレリウス等のモラリスト、「歴史神学の理論的基盤のうえに三位一体の信仰を根づかせ、発展させたキリスト教の内部」におけるアシジのフランチェスコ等の神秘思想家たち、近世ではモンテーニュ、デカルト、パスカル等を挙

げた上で、「非歴史的思惟方法のヨーロッパ的形態」を述べ、最後に「生活や仕事の問題を歴史として、また、歴史においてとらえようとしない庶民大衆」や、「世間のことは気にかけるが、社会のことは気かけないインテリ、独善であることを孤高であると思込んでいるインテリ、歴史について論じはするが、歴史に参加しようとするインテリ、歴史の外に学問や思想や文学や芸術が存在しうると決め込んでいるインテリ、そういうインテリの思惟方法を非歴史的とみるのに、なんの躊躇もいらない」と述べて、「日本的形態」に言及していた<sup>(26)</sup>。

上原は、その上で、これら「非歴史的思惟方法」に対して価値評価を含む見解を次のとおり述べていた。

「総じて歴史認識というものに前提されているはずの、また、歴史認識を生活現実の生きた総括的認識として成り立たせているはずの、歴史的思惟方法の存在理由をつきとめ、その意味と意義をあらためて確認するためには、先ず最初に、右に挙げたような非歴史的思惟方法を、たんに認識や思想の次元だけにおいてではなく、生活そのものの次元においてどう克服していくか、という実践問題に行動的に取り組まざるをえない、と思います。なぜなら、非歴史的思惟方法といえども、実は生活そのものに根ざしているものであり、非歴史的思惟方法自体が、実は歴史的なものであるからです。つまり、非歴史的思惟方法を意味のあるように窮極的に克服しうるのは、生活の場においてであり、いっそう深くは、生活の総体としての生きた歴史の場においてであって、決して認識そのもの、思想そのものの場においてではありえません。」[下線は引用者]<sup>(27)</sup>

この引用では下線を引いた箇所を確認されるように、「非歴史的思惟方法」は「克服」の対象として否定的な評価を、「歴史的思惟方法」を「意味と意義」のあるものとして肯定的に評価する姿勢が明白である。ただし、上原の全生涯を通覧するならば、この姿勢は、東京産業大学（後、一橋大学に名称変更）学長、一橋大学社会学部教授、日教組立国民教育研究所運営委員長（後、機構改革に伴い研究会議長）、国民文化会議会長等の役職に就き、社会的発言を展開した時期、すなわち1945年8月～1969年3月の期間に強まっていた。しかし、少なくとも「生命を蔑視した」医療機関による妻・利子氏の「被殺」（1969年4月）以後は、「非歴史的思惟方法」への注目が強まっていった。例えば、次の上原発言がある。

「時間の流れのなかで、事柄というものを理解したり、評価したりすることを、普通の意味では、歴史的思考というんでしょうけれども、妻に死なれてみると、その死んだ時点で、時間の歩みというものがとまってしまったんです。いろいろな思いがグルグル、グルグル妻の死という事実を旋回するだけじゃなく

て、時間もある意味では、いっこうにたたないんです。つまりほかの諸事物は、どんどん時間とともに流れていくのに、妻が死んだという事実とそれにかかわる諸事物とは流れないんですね。それでハッと気がついたのは、自分の感じ方というものが、ふだんのいままでの自分の感じ方と異質なものになっているということなんです。その異質なものというのは、いったいなにかと考えると、歴史のなかに出てきた事柄でありながら、少なくとも歴史的時間・歴史的空間にかかわらないで、いつまでも一つの意味を持ち続けているものとして、一つのことを見るという見方、つまり歴史のなかにながら、歴史にかかわりなしに、あるいは歴史を超えたものとして、そのものを見る見方というもの、少なくともそれに近いような考え方になっているということが、あらためて自覚されたわけです。これはたぶん、キリスト者が、キリストの死というものを考えたり、仏教者が、仏の涅槃というものを考えたりすることと同じじゃないだろうか。つまりキリストというものは、クリスチャンにとっては、過去の人間ではない、歴史のなかで流れて行く過ぎ去った人間ではなくて、永遠に現在の存在じゃないのか。いまから二千年近く前に、イエスという人が死んだということは、歴史的には事実だけれども、死んだ者がまた蘇るという形で考えられているのは、端的にいつてみれば、死んだにもかかわらず、死んではない存在として、イエスがキリストとして意識されているということじゃないのか。一方で歴史的に考えると同時に、非常に大事なことについては、歴史を超えた永遠に現在の問題としてそれを感じる、その二つの感じ方が、どうかかわるのかという問題です。それでさらに気がついてみると、いわゆる歴史家とか、歴史学者というものが、あらゆる事物を時間の経過のなかで流してしまうという考え方をしているのは、いちばん大事な点をネグっているということじゃないのか。永遠的に現在のものを時間の流れのなかでどう理解するかということは、むずかしい問題だけれども、私としてはそんな感じですよ。」[下線は引用者]<sup>(28)</sup>

引用文章中に下線を引いた箇所には、「非歴史的思惟方法」に対する注目が語られている。そこには肯定的評価が行われていることも明白である。上原は、1969年4月の妻・利子氏の「被殺」以後は、「東京退出」を行い、知人との交流を絶ち、「妻との回向」＝「妻との共存・共生・共闘」の生活を敢行し、「日蓮とその時代」の研究および「13世紀ユーラシアと世界史研究」を志向する中で、「非歴史的思惟方法」も「歴史的思惟方法」と並んで肯定的評価を行うようになった。

## 2.4. 「史心」による動態的な相対化

実は、この「歴史的・空間を超えたなものか」への明白な関心は、1940年発行・配付された『家君退隠記念文集 史心抄』（非売品の私家版）の『「史心抄」序』で次のように語られていた。

「甲の人には許されてゐることが、何故乙の者には許されてゐないのであらうか。或る場合には許されてゐる同じことが、何故他の場合には禁ぜられてゐるのであらうか。或る人々にとつて善となされてゐることが、何故他の人々には悪と考へられてゐるのであらうか。かういふ疑ひをば、人々はすでに幼い頃に懐かぬであらうか。それは規範意識のほのかなる目覚めであらうし、それは又、規範の絶対性に対するかそけき疑ひでもあらう。その疑ひのさ中にも、否、その疑ひあればこそ、人は幼いながらに、あらゆる場合を通じて許される何ものかに、あこがれないであらうか。時と所とを越えて常に易らぬ何ものかを捉へようとはせぬであらうか。絶対境への憧憬は、すでに幼童のものであるとも云へよう。[改行] 童心にして疑つたところ、その憧れたところは、今尚その俛、著者現在の心情でなくもない。規範が時所に制約せられてゐることを、事象が相対なることを観ればこそ、絶対境への憧憬は愈々深まりゆくのである。そして、絶対境へのあこがれあればこそ、事象相対化への努力は行はれるのである。うつろひゆく事象を易らぬと見る心こそ、空しくもはかなき迷執ではないか。相対化せらるべきものは迅速に相対化せられねばならないであらう。相対化のあらゆる努力に、尚厳として耐えうものこそ、絶対と云はるべきものであらう。かやうに観じて、相対化の努力を続けんとする心情、相対化の努力を通して絶対境を髣髴せしめんとする心情、かやうの心を仮に名づけて『史心』と呼ぶ。されば『史心』とは、西洋学者のいふ『歴史的精神』とは、自ら別の心情であらう。」[下線は引用者]<sup>(29)</sup>

引用した文章は『「史心抄」序』からの一部抜粋である。規範（意識）の相対性と絶対性に関する究明を、相対化作業を徹底させる彼方に展望するという、きわめて動態的な「相対化」精神が動態的な論理と筆致で表明されている。筆者は、この「史心」精神が『史心抄』収録の本編論稿に盛られていること、そして1940年以後、上原の全生涯にわたって一貫して持続されていったことを検証した。<sup>(30)</sup> 上原の全生涯を通して見た場合、「史心」という精神をその思想の奥底に潜在させた上で、「歴史的思惟方法」への肯定的評価を提唱し続けた時期が1960年代末までである。繰り返しての言及となるが、妻の「被殺」後には、「非歴史的思惟方法」への肯定的評価と「歴史的思惟方法」への肯定的評価が並存していったのである。上原理論の内部では、独特の歴史的アプローチ

である「史心」精神が、「非歴史的思惟方法」と「歴史的思惟方法」の二者を結びつけていた。換言すれば、「史心」精神がまず思想の基底部に沈潜しており、ある場合は「非歴史的思惟方法」として、また別の場合は「歴史的思惟方法」となって働いていた。「史心」という上原独特の相対化精神は、「非歴史的思惟方法」と「歴史的思惟方法」の両者の方法を前提し、徹底された後者の追究のはるか彼方に前者を望見する志向性が秘められていた。

以上の考察を小括すれば、上原の歴史的アプローチにおける「歴史」や「史」という語句は、事象・事物をその形成・変容過程に即してとらえるということに留まらず、あらゆる事象・事物を相対化し尽くし、時間・空間の中に限定づけるという意味を含んでいる、と考えられる。「生活現実の歴史化的認識」の「歴史化」の含意は、このような意味で事象・事物を相対化することである、ということができる。

## 3. 「課題化的認識」論における「歴史化」と「課題化」

### 3.1. 「課題化的認識」と「生活現実の歴史化的認識」を結ぶ契機としての「歴史化」

「2.」で分析・整理した内容を踏まえて、「3.」では「課題化的認識」における「課題化」の含意と、それが歴史的アプローチによって導かれる必然性について考察することにする。

ここで改めて「課題化的認識」に関する上原の説明を引用する。

「問題直観においてとらえた世界と日本と自己との分裂をどう克服していくかという問題、日本民族の過去と現在と未来とをどう統一的につないでいくかという問題、別の言葉でいいますと、歴史的現実の重荷を背負いながら、歴史的現実<sup>31</sup>に即して、歴史的現実を変更していくという問題、その問題の基本的構造と基本的内容を歴史的現実そのもののうちに探り出すことによって、問題直観を課題認識へと定着させていくこと」<sup>(31)</sup>

「生活経験のなかで直観的にとらえられた実際のかつ実践的な問題の、基本的な意味、構造、内容、動態を歴史的現実そのものに即して追究していくことによって、問題直観を問題認識へと定着させていく」、「事実や事態をたんに事実そのもの、事態そのものとして受けとるのではなく、解決、克服、対決、実現などを要する課題として受けとるところに、『課題化的』と呼んでよい認識方法が成り立つはずだ」[傍点は原文一引用者]<sup>(32)</sup>

これらの引用のうち、「歴史的現実の重荷を背負いながら」は、〈過去〉から〈現在〉に至る諸事象・諸契機

の累積を直視し受けとめる志向性が、「歴史的現実在即して」は、〈現在〉の諸事象・諸契機のリアリティをおさえる志向性が盛られている。この〈現在〉と〈過去〉との往還作業を基盤にして、さらに「歴史的現実を変更していく」という〈未来〉志向の見地が接続している。この〈未来〉志向の見地から、その必要性に切迫されることによって「その問題の基本的構造と基本的内容を歴史的現実そのもののうちに探り出すことによって、問題直観を課題認識へと定着させていく」という〈未来〉と〈現在〉の往還作業が想定されている。こうして、「課題化的認識」では、〈過去〉〈現在〉〈未来〉という時間軸上の往還が想定されていることが確かめられる。ただし、本考察で問うべき点はその往還の動態と〈過去〉、〈現在〉および〈未来〉の三者を結びつける関連づけの質である。これら三者の関連づけは、本節冒頭で引用した「課題化的認識」の説明文章にあるように、「問題直観においてとらえた世界と日本と自己との分裂をどう克服していくかという問題、日本民族の過去と現在と未来とをどう統一的につないでいくかという問題」（別の箇所では、「世界と日本と自己とを統一し、政治と教育、政治と文化を統一し、それから過去と現在と未来との分裂を克服していく」<sup>(33)</sup>と表現している）に対応可能なものでなくてはならない。

この点を考察する手がかりとして、もう一つの上原の認識方法表現である「生活現実の歴史化的認識」との関連について分析する。

「生活現実の歴史化的認識の主体性形成とその認識の同時形成」という問題提起は、前掲論文「現代認識の問題性」の中で、日本の「インテリ」および「大衆」が、「現代認識の主体性」を形成する上での有力な作業として提案されたものであった。それは、当時の「歴史認識としての現代認識」が実生活から遊離し、アクチュアリティを欠如させ、単なる「教養主義的遊戯的空想」に陥っている場合が少なくないととらえ、その克服のために歴史認識の方法を練り直す必要を受けとめたからであった。そして、上原は、歴史認識方法自体の主体的獲得を模索して、「歴史化的認識の主要な歴史的諸パターン」〔「古代ユダヤ的形態」, 「キリスト的形態」, 「イスラームの形態」, 「近代ヨーロッパ的形態」等の10パターンが例示されている—引用者〕と追究者自身のパターンの両者を対象化し、対決・格闘させることにより「追究者が自分自身の素朴なパターンからの自己脱皮をはたしうのように、歴史的諸パターンの歴史性が追究されていかなければなりません」と説いた<sup>(34)</sup>。筆者は、別稿で、この提案について「認識者自らがおかれている歴史的『形成』過程を対象化する作業と、その『形成』過程に対する批判的吟味を介した主体的方向づけの作業を同時に進めることが構想されている」と分析した<sup>(35)</sup>。そして、重要

問題（1969年4月以後の上原にとっては、「生命を蔑視」した医療機関が引き起こした妻の理不尽な「被殺」問題。それ以前の1960年代は「民族の独立」の問題）に直面した人間が、属す地域共同体の内部で形成されたエートス・社会規範を尊重しつつも、その重要問題の根本要因（遠因）を〈過去〉に求めることを主体的に選択して追究する認識作業である、と考察した<sup>(36)</sup>。

それは、容易に「歴史化」しえない重要問題（「被殺」、戦争、虐殺、公害、医療過誤等）の根本要因（遠因）を〈過去〉の経緯の中に位置づける世俗の作業（学問作業と同じ）である。重要問題を引き起こした根本要因の解明は多くの場合は困難であるため、残された「生者」は自らの主観の中で反芻する「死者の言葉」と対話を続けて、不断にその「謎」を追究しなくてはならない。その作業では、遠い彼方にある真実を追尋して〈現在〉認識と〈過去〉認識を往還させながら相対化し続ける意味での「史心」精神が求められる。ここでは、「史心」という相対化精神によって、容易に「歴史化」し得ない〈現在〉の心情が起点となって〈過去〉との往還が重ねられる。その際、〈現在〉と〈過去〉の認識各々が相互間の相対化・更新作業の往還によって結びつけられている。

以上のような「生活現実の歴史化的認識」の方法を「課題化的認識」の方法と照合させると、〈現在〉に引き起こされた重要問題が「未来」にまで継続・再来することを防ぐという問題意識に立ち、その根本要因を生み出した「歴史的現実の重荷」をとらえ「背負いながら」その「歴史的現実在即して」「その問題の基本的構造と基本的内容を歴史的現実そのもののうちに探り出すことによって、問題直観を課題認識へと定着させていくこと」となる。しかも、重要問題が「被殺」に相当するような場合、その「生者」にとって〈現在〉は時間の流れを超えた心理状態となり、「非歴史的思惟方法」の認識対象となる。一方でその心理状態を維持したまま、他方で「歴史化的認識」により問題を「歴史化」させて、その根本要因を〈過去〉から〈現在〉に至る「歴史的現実」の中に探ることになる。この場合、「歴史化」とは、「歴史を超えた事柄」を認識行為の起点に据えて、その根本要因を「歴史的現実」の中に探る作業を意味する。故に〈現在〉の「生活現実」の認識は、このような意味での「歴史化」という作業を導入することによって、「課題化的認識」に結びつく。

### 3.2. 上原理論における「未来」志向発想の由来

「3.1.」で既述した「課題化的認識」のうち、「歴史的現実を変更していく」という〈未来〉志向の由来について、ここで分析をもう少し深めることにする。その理由は、この分析により「課題化」が生み出される由来と方法論理を探る手がかりが得られるからである。

上原理論において〈未来〉志向発想が必要とされる背景には、次の引用で確認することができるように、上原による1960年頃当時の厳しい時代状況認識があったと考えられる。すなわち、〈現在〉の絶望とも思える困難状況の中であって、上原にとって唯一の「救い」となり得るかもしれないと考えられたものが、上原が願望を込めて提唱した次のような「国民教育」（＝「国民形成の教育」）であった。まず、「国民教育」に込めた上原の心情が語られた発言を引用する。

「日本の国民が現在置かれている歴史的・政治的問題状況というものをまさに自分自身の問題として自覚し、その自覚にたつて問題解決のために努力をしている人々で、こうした無力感や絶望感、虚無感や孤独感に襲われないでいる人は、多分、まれでしょう。ところで、そういう人々にとっての『救い』——それは同時に、ある問題自体の解決を約束するものでなければならぬのですが——は、あり得ないものでしょうか。『救い』であるかどうか私には断言できませんが、ここではじめて問題になるものが、『国民教育』である、と私はいいたいのです。『国民教育』というものは、あの無力感や絶望感、虚無感や孤独感から、問題意識をもって、問題状況に立ち向かった人々を解放するものでないかも知れません。そうではなくて、『国民教育』というものは、あの無力感や絶望感、虚無感や孤独感そのものをエネルギーの源泉として問題解決のための最後の足場を新しく築こうとする、いわば追詰められた作業を意味すると私は考えます。」<sup>(37)</sup>

「追詰められた作業」と表現されたように、強い切迫を受ける中で上原が提唱した「国民教育」（＝「国民形成の教育」）論の端的な説明は次のとおりである。

「今日の日本、という歴史的時点において、特に『国民形成』の教育が重要な意味をおびる、と私に考えられるのは、いわば『ポリテイク』の場において、『国民づくり』への切実な要求が存在する、と考えられるからでもある。ペダゴギークをポリテイクに従属させよう、とするのではない。ペダゴギークには、それとしての論理があり、ポリテイクにも、それとしての論理があることを十分承知の上で、やがてはペダゴギークとポリテイクとを統一的にとらえ、一体的に成り立たせる課題を想見しつつ、さしあたっては、ポリテイクの場における問題解決の基本的なかぎをペダゴギークの中に求めようとする、いわば高次の政治的発想に基づいて、『国民形成』の教育が問題になる、と私は考えるのである。」〔「ポリテイク」とは「政治、政治論」の意、「ペダゴギーク」とは「教育、教育論」の意—引用者〕<sup>(38)</sup>

「『国民教育』とは、現代日本を、それ以外の諸世界に対して、主体性と自律性を持った緊密な民族集団に

まで高めうる、行動と責任の主体としての『日本国民』の創造を一般的目標とし、その目標の実現を一般的課題とする『国民的立場』における意識的、組織的、継続的な教育活動の全体を意味する、という命題を仮説として提起してみよう。」〔傍点は原文—引用者〕<sup>(39)</sup>

〈現在〉の「ポリテイク」の場では実現できない当為目標（「主体性と自律性を持った緊密な民族集団にまで高めうる、行動と責任の主体としての『日本国民』の創造」と「民族の独立」）を掲げてその「問題解決の基本的なかぎをペダゴギークの中に求めようとする」発想には、おそらく数年間・数十年間・数百年間の年月が想定されている。こうした〈未来〉に向けた努力を継続して「歴史的現実を変更する」という「課題化的認識」の立論の第一歩段階から、「追詰められた作業」からの必然的な切迫・要請がその論理発想の中に埋め込まれていたのである。したがって、唯一の希望となった〈未来〉志向が起点となって、〈現在〉との往還、〈現在〉と〈過去〉の往還へと連なっていく。

### 3.3. 「課題化」の含意とそれが生み出される方法論理—「認識の未決定状態」, 「解決不可能の認知・自覚」および「俯瞰的視座」が「課題化」を生み出す—

これまで検討してきた「歴史的現実」をめぐる〈現在〉と〈過去〉および〈現在〉と〈未来〉の往還は、どのような方法論理によって「課題化的認識」の「課題化」（「課題認識」）を生み出すのか、という問いについて考察を深めることにする。

上原理論にとって歴史的アプローチとは、「史心」という相対化精神を中核とする世俗界の認識作業である、ということが出来る。この「史心」精神が躍動しながら一貫している上原の著作を解説しようと試みてみると、次の仮説に行き当たる。その仮説とは、上原の歴史的アプローチによる〈現在〉と〈過去〉との間にある因果関係、機能関係および意味関係のいずれについても、事象・事物の真理・真実を追究し解明しようとする志向性は強烈であるのだけれども、あらゆる相対化に耐え得る「絶対境」（普遍的真理・真実）があくまでもはるか彼方に望見されていることである。例外なく相対化が加え続けられ、徹底されていく過程そのものが、「絶対境」（普遍的真理・真実）への志向性と一体化されているとも言えることができる。

この仮説に立つならば、〈現在〉と〈過去〉の往還作業からもたらされる両者各々の認識は、不断の更新にさらされる未決定（保留）状態であり続けることになる。ただし、そもそも真理・真実への到達が不可能であるとする不可知論の立場が採用されているわけではない。あくまでも真理・真実への到達は、その志向性に支えられた探究過程の中で追究され続けられるのである。

こうした不断の相対化による未決定状態の更新は、「歴史的現実の解決・克服」が期待される〈未来〉につながる時間軸でも同様のことがあてはまる。もとより、〈未来〉とは、何人にとっても未知であるはずであるが、上原の「史心」は、その相対化の作用によって、〈未来〉の一定予見可能性とか、あるいは〈現在〉から連続する想定を見越してとらえる思考法をそもそも前提しない。

この「史心」精神が作用した場合、既述してきた「課題化的認識」の方法論理がどのようなものとなるかについて整理すると、次のように要約される。なお、次記で「問題」とは、既述してきた通り、「民族の独立」および大切な人の理不尽な「被殺」をはじめとする重要問題を意味する。

- ①〈現在〉における〈問題解決不可能状況とその不可能の認知・自覚〉が、認識の起点となる
- ②唯一の「救い」になり得るかもしれない「国民教育」の成果を〈未来〉に想像的に仮設する（「無力感や絶望感、虚無感や孤独感そのものをエネルギーの源泉として問題解決のための最後の足場を新しく築こうとする、いわば追詰められた作業」）。
- ③その仮設した〈未来〉の視座に立って、改めて〈現在〉の〈問題解決不可能状況とその不可能の認知・自覚〉を俯瞰する視野を持って〈現在〉の位置状況をとらえ直すことにより、その際生じる切迫を受けて、必要な課題を模索し始める。
- ④課題を模索するためには、〈現在〉の問題解決不可能状況を招来させた経緯とその根本要因（遠因）を追尋して〈過去〉を相対化する。
- ⑤〈過去〉の追尋と相対化を重ねつつ、同時に〈現在〉に立ち返って、〈問題解決不可能状況とその不可能の認知・自覚〉に関する問題認識を深める。
- ⑥以上の①～⑤の過程は循環しながら重ねられていくが、そのすべての過程にわたって、〈認識の未決定状態〉が未決定のまま更新されていく。

1970年代の上原理論に顕在化した理不尽な「被殺」問題における「死者のメディア」としての行動の場合、①および③は「歴史を超えた」特別な心情からの出発（「非歴史的思惟方法」）となり、②はその再来を阻もうとする志向性となる。④に至って、問題の「歴史化」を通して「歴史的思惟方法」を採用することになる。この場合、「歴史を超えた心情」が起点となっているため、俯瞰的視座から生まれる切迫は一層強いものとなる。

この方法論理では、〈未来〉の視座を想像的に仮設することによって俯瞰する視野がもたらされ、その視野の下で〈現在〉の位置状況がとらえ直される。これを契機とした上で〈現在〉と〈過去〉との往還が不断に重ねられていく。この往還は、問題の根本要因を解明する作業

の見地から、俯瞰する視野を持って再び〈現在〉の位置状況がとらえ直される。こうして〈過去〉→〈現在〉→〈未来〉という因習的な時の流れとは異なり、これとは逆向きとなる〈未来〉からの〈現在〉の俯瞰と、〈過去〉からの〈現在〉の俯瞰が重なって〈現在〉の位置状況がとらえ直される点に、上原固有の時間軸観（歴史観）を見出すことができる

実践面および認識面の両面において、〈「歴史的現実」の問題状況の把握〉と〈それを解決・克服することができない不可能状況の把握とその認知・自覚〉と、その不可能状況に対する「史心」精神による相対化が加えられ、すべての認識が未決定状態のまま更新されていく。この相対化では、想像的に仮説した〈未来〉からの俯瞰的視座からの切迫と、問題の根本要因の追尋からもたらされる〈過去〉からの俯瞰的視座からの切迫を受けることとなる。〈解決不可能状況の認知・自覚〉を有する学習主体にとっては、この意味での切迫を受けとめることによって、「問題直観」から「課題認識」への質的転換が生まれ、「事実や事態をたんに事実そのもの、事態そのものとして受けとるのではなく、解決、克服、対決、実現などを要する課題として受けとる」志向性が生まれることになる。特に、「被殺」のように容易に「歴史化され得ない」〈現在〉の心情が起点となる場合は、〈未来〉からの切迫も、〈過去〉からの切迫も一層強くなる。上原は、以上に述べたような含意と方法論理を「課題化」という語句に盛り込んだのである。

#### 4. まとめ—「過去—現在—未来の分裂を克服する」の含意—

以上に述べてきた主要な点を整理すると、次のように集約される。

- ①上原の歴史的アプローチの大きな特徴は、〈現在〉の問題意識と〈過去〉の史実認識との往還を行うことである。
- ②〈現在〉と〈過去〉との往還によって「歴史的現実」という結節が導かれる。その具体的事例にまで踏み込んで言えば、上原は、1960年代の時代状況の中で、「民族の独立」という問題を最重視していた。
- ③上原の歴史的アプローチには、「生活や仕事を歴史的にとらえようとする」「歴史的思惟方法」と、「歴史を超えた永遠な」なにかをとらえようとする「非歴史的思惟方法」の両者が並存していた。
- ④上原が提起した「史心」精神は、事象・事物に対する相対化作業を徹底させることによって、はるか彼方に絶対的なものを展望する動的な相対化精神である。上原理論における「歴史化」とは、事象・事物をその形成・変容過程に即してとらえることに留まらず、あらゆる事

象・事物を相対化し尽くし、有限な時間と空間の中に限定づける、という意味を含んでいる。

⑤したがって、上原が提起したもう一つの認識方法である「生活現実の歴史化的認識」における「歴史化」とは、「歴史を超えた事柄」を認識行為の起点に据えて、その根本要因を「歴史的現実」の中に探る作業を意味する。故に〈現在〉の「生活現実」の認識は、このような意味での「歴史化」という作業を導入することによって、「課題化的認識」に結びつく。

⑥他方で、上原理論はその立論の前提において〈未来〉志向発想を含んでいる。上原は、1960年頃の厳しい「歴史的現実」の中で唯一の「救い」になり得るかもしれないものとして、本文で示した「国民教育」に希望を託した。それは、「無力感や絶望感、虚無感や孤独感そのものをエネルギーの源泉として問題解決のための最後の足場を新しく築こうとする、いわば追詰められた作業」であった。上原の〈未来〉志向性は、この厳しい状況認識に対する危機感に由来するものであった。

⑦〈「歴史的現実」の問題状況の把握〉と、それを解決できないという〈解決不可能状況の把握とその認知・自覚〉は、まず想像的に仮設した〈未来〉からの俯瞰的視座による切迫と、問題の根本要因の追尋からもたらされる〈過去〉からの俯瞰的視座による切迫を受けることによって、〈現在〉における〈解決不可能状況の把握とその認知・自覚〉は、不断にとらえ直される。この文脈により、〈認識の未決定状態の更新〉、〈解決不可能状況の把握とその認知・自覚〉および〈俯瞰的視座からのとらえ直し〉によって、課題認識が生まれる。

最後に、以上の考察で述べてきた方法論理を有する「課題化的認識」は、どのような意味で「過去と現在と未来とをどう統一的につないでいくか」(換言すれば「過去と現在と未来との分裂をどう克服していくか」)に対応することができるのか、という問いについて考察する。

既述したとおり、「課題化的認識」の方法論理においては、独特の相対化精神である「史心」が認識の起動力となっている。このため、これら一連の認識過程において認識成果として得られた全ての「解」は不断に相対化作用を受け続けるため未決定状態のまま更新され続けていく。したがって、上原理論では、認識作業によって解明された範囲内で〈過去〉と〈現在〉の因果関係、機能関係および意味関係を介して順接されるのではなく、相対化によって得られた暫定的な「解」を更に相対化する〈過去〉と〈現在〉の相対化往還によって、両者間の結節が設けられている。〈現在〉と〈未来〉との往還についても同様である。このことから、「過去と現在と未来とをどう統一的につないでいくか」(換言すれば「過去と現在と未来との分裂をどう克服していくか」)の含

意は、〈過去〉、〈現在〉および〈未来〉という時間軸上の三者は、認識の成果である「解」によって順接して結びつけられるのではなく、「分裂」を引き受け直視した上で、相対化という否定と更新的作用によって、かろうじて連関づけられている、という旨である、とすることができる。更には、本稿冒頭に既述した〈科学知〉と〈経験知〉もまた、以上の過程において両者ともに常に「史心」による相対化にさらされ、その相対化往還作用によって連関づけられることになる。

本稿では、その論点である「課題化的認識」における「課題化」の方法論理に迫るため、上原の歴史観・時間軸観にまで立ち入り、考察を深めることになった。筆者にとって、上原理論における時間論は初めての試みである。この考察の中で、特に「非歴史的思惟方法」と「歴史的思惟方法」との関連は上原の「死者のメディアとしての生者」論と関わってきわめて奥深い主題であることを改めて重く受けとめることとなった。「非歴史的思惟方法」の認識対象である「時を超えたなものか」は、「死者と歴史」の問題とも重なる主題であるが、本稿では今後の研究課題として残された。これまで懸案としてきた上原思想における「法華経的世界観」と「聖書的世界観」への理解を深める中で、他日を期したい。

【註】※上原弘江・編『上原専祿著作集』(評論社)について以下、『著作集』と記す。

- (1) ここでの共同学習の再評価に関する記述は、藤岡貞彦『社会教育実践と民衆意識』(草土文化、1977年、244-255頁)における記述と論点を整理したものである。
- (2) 島田修一「現代成人学習内容論の研究視角」(日本社会教育学会年報編集委員会編『現代成人学習内容論』(同学会年報「日本の社会教育」第33集)東洋館出版社、1989年、3-6頁)。
- (3) 島田が「学習内容は学ばれるべき個別科学の論理においてではなく、学習者の認識の発展のすじ道に即して編成されるべき」と主張するのは異なり、上原は、「学問の生活化」(=「学問と生活の結合」)の見地から個別科学の論理自体を問い、相対化する強い志向性を持っていた。筆者は、この知見を片岡弘勝「戦後『学問の生活化』論の基底—成人学習内容論における上原専祿理論の位置と射程—」(『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』創刊号、1996年)で論じた。
- (4) 前掲、「戦後『学問の生活化』論の基底—成人学習内容論における上原専祿理論の位置と射程—」および、片岡弘勝「上原専祿『主体性形成』論における認識深化の方法論理—固有の『リアリズム』を醸成する認識の動態性—」(『奈良教育大学紀要 第61巻第1号(人文・社会科学)』2012年)。
- (5) 上原「日本における独立の問題」(初出1961年)、『著作集14 国民形成の教育 増補』1989年、81頁。
- (6) 上原「アジア・アフリカ研究の問題点」(初出1961年)『著作集25 世界史認識の新課題』1987年、65頁。
- (7) 上原「現代認識の問題性」(初出1963年)、『著作集25 世界史認識の新課題』1987年。
- (8) 筆者による上原理論研究のうち、主なものは次記のとおり。

- りである。前掲「戦後『学問の生活化』論の基底—成人学習内容論における上原専祿理論の位置と射程—」,「戦後主体形成論における『地域』概念—上原専祿『生活現実の歴史的認識』論の構造—」(『日本社会教育学会紀要』No.34, 日本社会教育学会, 1998年),「戦後成人学習内容論における『地域』概念—上原専祿『地域—日本—世界の統一的把握』論の方法意識—」(『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第3号, 1998年),「上原専祿『課題化的認識』論における『主体性』概念—『インテリの大衆化』論と学習論の接合方法を中心に—」(『日本社会教育学会紀要』No.37, 日本社会教育学会, 2001年),「上原専祿『主体性』形成論における『国民文化』概念—『国民形成の教育』論にみる価値づけとの関連を中心に—」(『日本社会教育学会紀要』No.40, 日本社会教育学会, 2004年),「上原専祿『主体性形成』論における『近代』相対化方法—生涯にわたる時期区分とその指標—」(『奈良教育大学紀要』第54巻第1号(人文・社会科学)2005年),「上原専祿『主体性形成』論における価値づけ方法—〈抽象的肯定〉から〈具体的否定〉への変容—」(『日本社会教育学会紀要』No.42, 日本社会教育学会, 2006年),「主体的学習の環境条件としての『地域』概念—実践分析のためのモデル設計—」(『奈良教育大学紀要』第57巻第1号(人文・社会科学), 2008年),「上原専祿『主体性形成』論における『個』概念—「共同体」相対化と「近代」相対化の相—」(『奈良教育大学紀要』第58巻第1号(人文・社会科学), 2009年),「上原専祿『主体性形成』論における認識深化の方法論理—固有の『リアリズム』を醸成する認識の動態性—」(『奈良教育大学紀要』第61巻第1号(人文・社会科学), 2012年),「上原専祿『主体性形成』論における『史心』の位置と構造—『史心抄』(1940年)にみる動態的認識方法—」(『奈良教育大学紀要』第62巻第1号(人文・社会科学), 2013年),「上原専祿『主体性形成』論における『教育的』発想—社会教育における教育的価値把握のための視点—」(『奈良教育大学紀要』第63巻第1号(人文・社会科学), 2014年),「上原専祿『死者・生者』論における『主体性』発動の基盤と契機—『他者』としての『死者』からの『切迫』と『有責性』—」(『奈良教育大学紀要』第65巻第1号(人文・社会科学), 2016年),「上原専祿『死者のメディア』論における『主体性形成』の条件—『死者の言葉を聴きとる』方法の含意—」(『奈良教育大学紀要』第66巻第1号(人文・社会科学), 2017年)。
- (9) 筆者は、片岡弘勝「上原専祿研究の到達と課題—その主体形成論・学習論を中心に—」(『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』(第6号, 香川大学生涯学習教育研究センター発行, 2001年)の中で, 上原理論に関する先行研究(石原保徳, 浜林正夫, 田中陽児, 吉田悟郎, 渡辺広, 岡村達雄, 朱浩東, 田中昌弥, 宮衛, 村井淳志, 桜井敏)を取り上げ, 各々のモチーフと主要論点および「その意義に関する吟味・検討」を整理した。
- (10) 田中陽児「歴史学と『世界史』教育」,『岩波講座 世界歴史30 現代歴史学の課題』岩波書店, 1971年, 540-541頁。
- (11) 筆者は、片岡弘勝「上原専祿『主体性形成』論における『史心』の位置と構造—『史心抄』(1940年)にみる動態的認識方法—」(『奈良教育大学紀要』第62巻第1号(人文・社会科学), 2013年)で, 上原独特の「史心」精神に関する考察を通して, きわめて動態的な上原理論の方法論理を掘り下げて詳述した。
- (12) 上原『歴史学序説』(大明堂, 1958年)の中の「第一部 歴史学序説」(1958年)の中の「第一部 歴史学序説」23-24頁。
- (13) 上原, 前掲『歴史学序説』の中の「第一部 歴史学序説」30-31頁。なお, 同様の言及例として次記2点がある。「歴史学というものは、『知る値打ちがある』として主体的に選びとった人間の生活現実を対象とするところの一つの学問である, といえよう。」(『歴史学序説』の中の「第一部 歴史学序説」45頁)および, 「さまざまな問題意識, さまざまな生活意識を現代においてにないつつ, 歴史研究者たちはそれぞれの『意味』の自覚において, 過ぎ去った生活現実をめいめいの研究課題として選び取り, その課題の追求過程において『意味』の自覚を, あるいは深め, あるいはそれに修正を加える。それによって, 課題の設定やその追求の出発点となったところの問題意識や生活意識それ自体を, あるいは深め, あるいはそれに修正を加える。これが, 現代における歴史学の生態の少なくとも一面なのである。」(『歴史学序説』の中の「第一部 歴史学序説」47-48頁)。
- (14) 上原, 前掲「現代認識の問題性」49-50頁。
- (15) 上原「現代アジア・アフリカの世界史的問題情況」(初出1967年)『著作集19 世界史論考』(1997年)33頁。
- (16) 上原, 前掲「現代アジア・アフリカの世界史的問題情況」38-39頁。
- (17) 上原による講演「日蓮とその時代—世界史認識の意味と方法の問題によせて」(岩波市民講座, 1965年10月7日および14日の2回, 会場=東京新宿紀伊国屋ホール)および講演「モンゴル人の〈世界征服〉と十三世紀ユーラシア世界—日蓮認識の意味と方法によせて—」(岩波市民講座, 1966年6月2日, 9日および16日の3回, 会場=東京新宿紀伊国屋ホール)。同典拠は, 上原「本を読む・切手を読む」(初出1975年)『著作集17 クレタの壺—世界史像形成への試読—」(1993年, 307-309頁)の記述。
- (18) 上原「民族の独立と国民教育の課題」(初出1961年), 前掲『著作集14 国民形成の教育 増補』および上原, 前掲「日本における独立の問題」。
- (19) 上原, 前掲「日本における独立の問題」79頁。
- (20) 上原, 前掲「現代認識の問題性」37-40頁。
- (21) 上原, 前掲「現代認識の問題性」54頁。
- (22) 上原, 前掲「現代認識の問題性」15頁。
- (23) 上原, 前掲「現代認識の問題性」16頁。
- (24) 上原, 前掲「現代認識の問題性」17頁。
- (25) 上原, 同前。
- (26) 上原, 前掲「現代認識の問題性」18-19頁。
- (27) 上原, 前掲「現代認識の問題性」19頁。
- (28) 上原「過ぎ行かぬ時間」(初出は『未来』1970年1月号収載)『著作集16 死者・生者—日蓮認識への発想と視点—」(1988年)15-16頁。同書収載の「一 過ぎ行かぬ時間」の直後の「二 死者が裁く」には, 「一 過ぎ行かぬ時間」と同じモチーフに立って執筆された「1 わかれは悲しく」(初出1969年), 「2 生命の蔑視」(初出1970年), 「常にここにあつて滅せず」(初出1970年), 「4 死者が裁く」(初出1970年)という論稿が収載されている。また, 『著作集15 歴史的省察の新たな対象 新版』(1990年)の上原専祿「あとがき」(初出1970年)の冒頭(197-204頁)にも「一 過ぎ行かぬ時間」と同じモチーフから記されている。
- (29) 上原「『史心抄』序」, 上原『家君退隠記念文集 史心抄』(非売品の私家版)1940年, 6-8頁。

- (30) 片岡弘勝, 前掲「上原専祿『主体性形成』論における『史心』の位置と構造—『史心抄』(1940年)にみる動態的認識方法—」(『奈良教育大学紀要』第62巻第1号(人文・社会科学), 2013年)。同論文では、「史心」が上原の1940年代以後の全生涯の活動・思想を一貫していたこと, ①「史料に即し, 史料批判に立脚せる」実証的かつ客観的な史実認定を徹底する志向性, ②東西両文明・文化および日本の文明・文化に対する「相対化」を通して個性・特異性と共通性・普遍性とを追究する志向性, ③学術的アプローチ(前掲①)の次元を超えた「絶対境の髣髴化」の志向性, ④肯定する文脈で論述している事柄の限界や弱点を指摘し, 当該事柄とは逆の方向性もつ可能性に着目した上で, これらのいずれでもない第三の方向性を模索する論法, という四つの特徴を持つこと, 上原が構想した認識深化の構図を<分子/分母>として示すならば, <分子=主体性形成を支える認識/分母=「インテレクトの力では一挙に把握できないetwas」(記述し得ない「なにものか」を含む)の認知とそれを究明し生かそうとする志向性>であること, 上原は, 「主体的意味づけと客観化」の両極往還という「史心」の躍動をとおして, この構図のうち, 分母要素を基盤にして, 分子要素の「醸成」「発酵化」に似た変容が進行していく動態を構想したことを検証した。
- (31) 前掲註(5)。
- (32) 前掲註(6)。
- (33) 上原, 前掲「日本における独立の問題」92頁。
- (34) 上原, 前掲「現代認識の問題性」13-28頁。
- (35) 片岡弘勝, 前掲「戦後主体形成論における『地域』概念—上原専祿『生活現実の歴史的認識』論の構造—」, 『日本社会教育学会紀要』No.34, 1998年, 35頁。
- (36) 片岡弘勝, 前掲「上原専祿『死者のメディア』論における『主体性形成』の条件—『死者の言葉を聴きとる』方法の含意—」, 『奈良教育大学紀要』第66巻第1号(人文・社会科学), 2017年。
- (37) 上原「世界史的現実と国民教育」(初出1960年), 前掲『著作集14 国民形成の教育 増補』184頁。
- (38) 上原, 「国民形成の教育」(初出1960年), 前掲『著作集14 国民形成の教育 増補』9頁。
- (39) 上原, 前掲「国民形成の教育」17頁。